

巻 頭 言

鹿児島生協病院 医局学術委員会委員長
樋之口洋一

最近、「観客（傍観）民主主義」について考えることがあった。

米国ジャーナリスト界の長老で、国内・国際政治の評論家であったウォルター・リップマン（1889-1974）によると「一般の人々は共通の利益というものを全く理解しないので、ものごとを処理できるスマートな責任ある特別な階級の人々がそれを理解して管理しなくてはならない。大衆は『とまどえる群れ』で、彼らは『観客（傍観者）』にとどまることが理想であり、唯一参加できる行動は特別な階級の知識人を選ぶ（選挙する）ことである。いったん特別な階級の中で誰が好ましいかについて意見を言った後（選挙の後）は、大衆は後ろに退いて傍観することになっている。これがうまく機能しているのが民主主義だ」と述べている。リップマンは更に、世論操作技術によって人々が望んでいないことについても「同意を製造する」ことができるとも言っている。



我々が小学校で教わった民主主義とは全く異なるが、これが資本家の本音の民主主義らしい。同じ発想で日本の戦後政治も連綿と続いてきた。極めつけが小泉構造改革であり、中身の無いキャッチフレーズでマスコミも動員して世論操作を行い、「観客」が中身を知る前に次々と悪法を通してきた。郵政民営化、労働者派遣法改悪、医療制度改革関連法（12本の医療にかかわる法を一挙に大改悪）成立などなど枚挙にいとまがない。

しかし最近になって様相が変わってきた。後期高齢者医療制度反対の運動はマスコミも無視できないほど大きなものになり、参議院では制度廃止が採択され（2008年6月6日）、舛添厚労省大臣（2008年9月現在）も「制度を廃止し新制度を」と言わざるを得なくなった（2008年9月19日）。医師不足問題も今、「ドクターウェーブ」の運動で医師・医学生自身が立ち上がりつつある。

そろそろ大勢の観客がスタンドからグラウンドへ降りて、「スマートな責任ある特別な階級」に物申す時が来たと実感しているのは私だけではないと思う。この医報も医局の学術論文集から脱皮して、医療困難な事例の論文などその一翼を担う雑誌に成長することを期待したい。